

## RPにおける単母音の変化

著者	山本 晃司
雑誌名	研究論集
巻	89
ページ	39-54
発行年	2009-03
URL	<a href="http://doi.org/10.18956/00006183">http://doi.org/10.18956/00006183</a>

## RP における単母音の変化

山 本 晃 司

### 要 旨

Gimson による *An Introduction to the Pronunciation of English* の初版は1962年に出版され、その第7版は2008年に出版されている。初版から第7版までの記述内容を比較するといくつか変化が見られる。本稿では現代イギリス英語の標準発音である Received Pronunciation (RP) の単母音を中心にどのような発音変化が起きているのかを述べ、他の音声学者の見解も交えながら考察を加えた。また、30年前に吹き込まれた英語音声教材と近年出版された教材を使い、単母音のフォルマントを測った比較検証も行った。

今回取り上げた単母音の中で特に、前舌母音の /e/ と /a/、後舌母音の /o/ と /u:/ では大きな変化が起っており、RP の揺れ動く単母音の状況を取り上げた。

キーワード：変化、広い音、狭い音、前舌化、反時計回り

### はじめに

言語変化は語彙や文法のみならず発音においても起こる。本稿では、英語、特に現代イギリス英語において標準発音とされている Received Pronunciation (以下、RP) で起きている変化を中心に上げていく。

現代イギリス英語の発音を取り扱った文献は数多くあるが、今回は、その中でも改訂を積み重ねてきた文献、*An Introduction to the Pronunciation of English* を基に話を進めていく。初版 (1962)、第2版 (1970)、そして第3版 (1980) は A. C. Gimson により改訂出版され、第4版 (1989) は Susan Ramsaran が引き継ぎ、第5版以降 (1994, 2001, 2008) は、本のタイトルも *Gimson's Pronunciation of English* へと改名され Alan Cruttenden が引き継いでいる。初版から第7版に至るまでに、各母音の記述内容にはいくつか変化が見られる。本稿では RP の単母音 (/i:, ɪ, e, æ, ʌ, ɜ:, ɑ:, ɒ, ɔ:, ʊ, u:/) に焦点をあて、どのような変化が起きているのかを他の音声学者の見解にも触れながら考察していきたい。

### 1. 前舌母音 /i:, ɪ, e, æ/

各母音を見ていく際に、基本母音(Cardinal Vowel、以下 C) を参照することがあるのでその基本母音図を載せておく。それぞれの母音には4段階の舌の高さがあり、C [i] と C [u] には“close”、C [e] と C [o] には“close-mid” (“half-close”)、C [ɛ] と C [ɔ] には“open-mid” (“half-open”)、C [a] と C [ɑ] には“open” という名称がある。

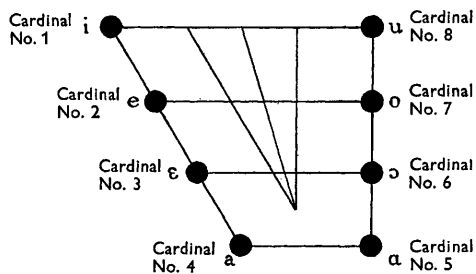


図1. 基本母音 (Jones, 1956: 21)

また、以下で載せている母音図では RP 以外の変種も黒点で表示されているが、RP に該当する音にのみ矢印をつけて示していく。発音記号の精密表記についても第5版以降では [ ˌ ] が [ ˙ ] に、[ ˘ ] が [ ˙ ] になっている。

#### 1.1. /i:/ と /ɪ/ についての記述

“The quality is nearer to C [i] than to C [e].”  
(Gimson, 1962: 94)

初版から第7版において /i:/ の音質に変化は見られず<sup>1)</sup>、/i:/ の位置を示した母音図においても初版から第7版まで同じである。

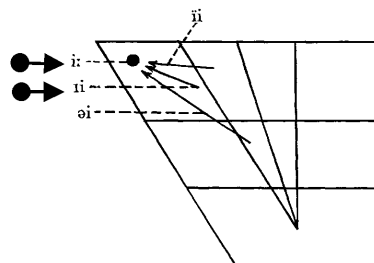


図2. /i:/ の配置 (Gimson, 1962: 95)

/i:/ には変化は見られなかったが、/ɪ/ はどうであろうか。まずは /ɪ/ の音質とその母音図を載せておく。

“The quality is that of centralized C [e] = [ɛ̃].” (Gimson, 1962: 96)

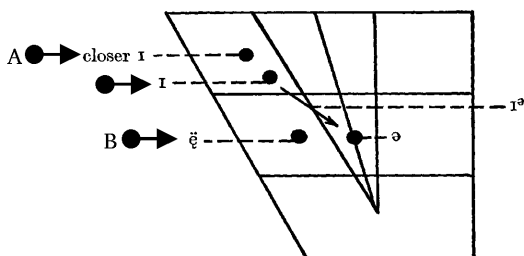
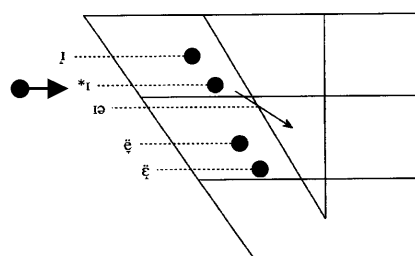


図3. ① /ɪ/ (Gimson, 1962: 97)



② /ɪ/ (Cruttenden, 2008: 109)

上記にある /ɪ/ の音質は初版から第7版まで変わりがなく、母音図においても変化がない。しかし、初版と第2版では RP 内に /ɪ/ の変種があることが述べられている。

“Variations occur, too, amongst RP speakers: thus, a conservative RP form may be much closer than the general RP /ɪ/ described above, coming nearer to the quality associated with /i:/; other speakers, often of advanced RP, use a type which is lower than half-close (= [ɛ̞]).”

(Gimson, 1962: 97)

年配層 (Conservative RP) が使う /ɪ/ は矢印 A のより狭い /ɪ/ を使うのに対し、若年層 (Advanced RP) が使う /ɪ/ は矢印 B のより広い音としている<sup>2)</sup>。ところが、第3版、第4版では上記の引用部分がなくなり、第5版以降<sup>3)</sup>では、図3の②にあるように、“common in RP”<sup>4)</sup> (Cruttenden, 1994: xv) を示す星印 \* で /ɪ/ に統一されている。

/ɪ/ に関しては年齢層による違い以外に、さらに2つの変化が見られる。1つは、強勢を受けない音節での /ɪ/ (*problem, possible, interesting*) である。初版と第2版では“free variation” (Gimson, 1962: 97) として /ɪ/ または /ə/ があるとしているが、第3版以降では /ə/ を使う傾向が次第に強くなりつつあるとし、その詳細がまとめられている<sup>5)</sup>。2つ目は、*city, lady, coffee* などの強勢を受けない語末での /ɪ/ である<sup>6)</sup>。第3版では若い世代の人々の間で“a short variety of /i:/” (Gimson, 1980: 105) を使うとしているが、第5版以降は年齢層を特定せず、/i/ で実現されることが多くなっているとしている。近年出版されている発音辞典や英英辞典においても /i/ という記号が採用されており、この変化はかなり確立されていると言える<sup>7)</sup>。

## 1.2. 広い音へと向かう /e/

前舌母音 /e/ と /æ/ については記述内容と母音配置において大きな差が見られる。まずは初版での /e/ をとりあげる。

“The quality lies between that of C [e] and that of C [ɛ] = [ɛ̞] or [ɛ̝] ... The general RP variety of /e/ tends to be closer to C [e] rather than to C [ɛ].”

(下線は筆者、以下同じ) (Gimson, 1962: 99)

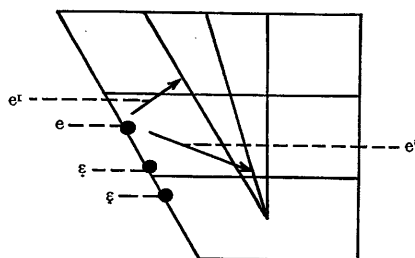


図5. /e/ (Gimson, 1962: 99)

初版から第4版までの /e/ は C[e] と C[ɛ] の間にあるとしているものの、図5を見るとやや C[e] に近い配置であり、比較的狭い /e/ になっている<sup>8)</sup>。ところが、第5版になると下線部が以下のように変わっている。

“The quality lies between that of C[e] and that of C[ɛ] = [e] or [ɛ]. ... The general RP variety of /e/ tends to be closer to C[ɛ] rather than to C[e].” (Cruttenden, 1994: 102)

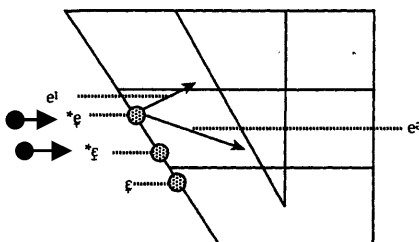


図6. /e/ (Cruttenden, 1994: 102)

図6では図5と同じように狭い [e] にも記号が付けられているものの<sup>9)</sup>、第5版での説明にもあるように C[e] に近い音にも星印が付けられている。初版から第5版にいたるまでに /e/ に変化が起り、初版の説明とは逆に /e/ が C[ɛ] に近い音へと向かう傾向が現れたことが分かる。

### 1.3. 広い音へと向かう /æ/

狭い音から広い音へと向かう傾向は /e/ だけではなく、/æ/ にも同じような傾向が出始めている。その /æ/ の音質は初版では次のようになっている。

“The mouth is slightly more open than for /e/; the front of the tongue is raised just below the half-open position, with the side rims making a very slight contact with the back upper molars; the lips are neutrally open.” (Gimson, 1962: 100)

初版から第4版までは /æ/ を half-open より下、つまり狭い /æ/ としている。しかし、第5版以降では、上記の下線部を “the front of the tongue is raised to a position midway just above open” (Cruttenden, 1994: 103) と変えており、/æ/ が C[ɛ] に近い位置から open-mid と open の中間に移動している。第6版では /æ/ という記号がもはや的確ではないと述べられているが、実際には第6版、第7版でも /æ/ という記号が採用されている。しかし、その母音図をみると、第5版と第6版は初版よりやや下がった位置の C[ɛ] と C[a] の中間になっており、第7版では、図7の③にあるように、星印が /æ/ だけでなく /a/ にも付けられている。

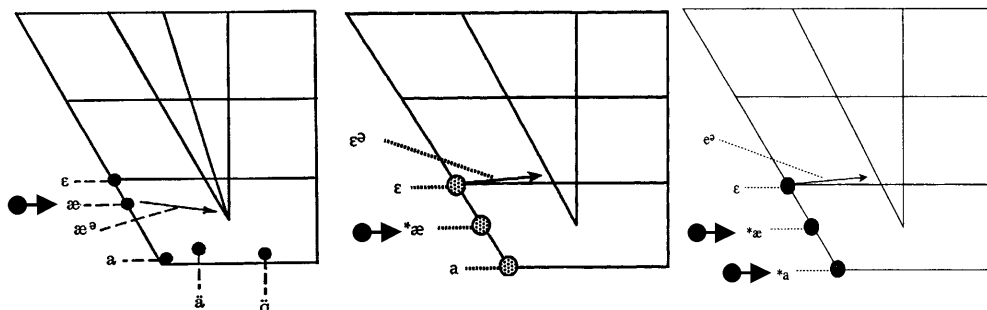


図7. ① /æ/ (Gimson, 1962: 101) ② /æ/ (Cruttenden, 1994: 103) ③ /æ/ (Cruttenden, 2008: 113)

/æ/ がより広い音へと向かっているという指摘は Cruttenden (1994, 2001, 2008) だけでなく、Roach (1983)、Wells (1997)、Roach and Hartman (1997)、Collins and Mees (2003, 2008)、Hughes et al. (2005) でも指摘されており、/æ/ が着実に広い音へと向かっていることが分かる。

#### 1.4. 何が /e/ と /æ/ を広い音へ向かわせるのか？

/e/ を狭い音とした初版から第4版において Gimson (1962: 99) は /æ/ の音も狭い音としている。Gimson (1962: 99) によると、音質的な差を保つため、/æ/ が狭い音であれば、/e/ も狭い音となり、逆に、/e/ が広い音であれば /æ/ もより広い音になるとしている<sup>10)</sup>。確かに、第5版以降でも /e/ を広い音としている分、/æ/ もより広い音になっている。しかし、何が /e/ と /æ/ を広い音へと向かわせているのであろうか。

その要因に Cruttenden (1994: 103) は長年にわたって中舌母音<sup>11)</sup> の /ʌ/ が C [a] に向かう傾向にあったことをあげている<sup>12)</sup>。つまり、/ʌ/ の移動により、/æ/ が移動し、その /æ/ の移動の影響を受けて /e/ も移動した流れとなっている<sup>13)</sup>。

問題としているこの /ʌ/ の音質は初版において次のように説明されている。

“The quality is that of a centralized and slightly raised C [a] = [ä].” (Gimson, 1962: 102)

初版の時点ですでに /ʌ/ は C [a] に近い音質となっている。ただし、これは若年層の /ʌ/ であり (図8. 矢印 A)、年配層の RP (図8. 矢印 B) は “a more retracted vowel” (Gimson,

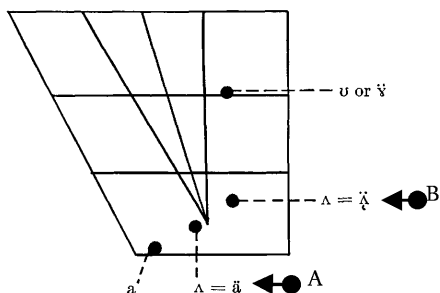


図8. /ʌ/ (Gimson, 1962: 103)

1962: 102) であるとされている。Cruttenden (1994) の言う /ʌ/ の移動は初版の時点ですでに始まっていたことが伺える。

第5版、第6版は、図9にもあるように C [a] 寄りの /ʌ/ で統一されているが、Cruttenden (2008: 115) は第7版で /æ/ と /ʌ/ が混同しないように今では /ʌ/ の前方移動が止まっており、

後寄りの /ʌ/ も使われつつあるとして、この /ʌ/ にも星印をつけている。

後寄りから前寄りへ、前寄りから後寄りへと揺れ動く /ʌ/ ではあるが、その前後移動により、/æ/ が C [a] へと向かい、その空白を詰めるべく /e/ も C [ɛ] へと移動したと考えられる。この点も検証すべく、次節では、/i:/, ɪ, e, æ, ʌ/ のフォルマントを測り検証していきたい。

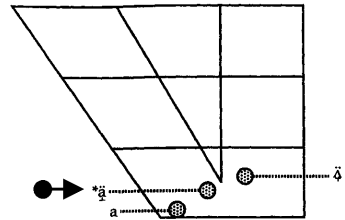


図9. /ʌ/ (Cruttenden, 1994: 105)

## 2. 前舌母音のフォルマントと分析

今回使用する音の資料は、RP が吹き込まれている英語発音教材である。約30年前の教材から John Trim の *English Pronunciation Illustrated* (1975) と2007年の教材から Jonathan Marks の *English Pronunciation in Use — Elementary* (2007) での母音フォルマントを比較し、上で述べてきたような変化があるかどうかを検証する。いずれも男女の発音を取り上げ、同じ語または母音そのものを採用した。フォルマントを測る際に使用したソフトウェアは Ladefoged (2006) で紹介されている *WaveSurfer*<sup>14)</sup> である。以下の表で記されている数値は第1フォルマント (以下、F1) と第2フォルマント (以下、F2) の数値である。F1 は母音の高さを示し、F2 は後舌度を示している。なお、前舌・後舌母音のフォルマント数を基にした表<sup>15)</sup> は本稿の末尾に付けている。

	Male					Female			
	Trim (1975)		Marks (2007)			Trim (1975)		Marks (2007)	
	F1	F2	F1	F2		F1	F2	F1	F2
/i:/	286	2531	286	2571	three	367	2898	327	2980
big	327	2245	367	2163	in	490	2531	490	2735
letter	408	1755	694	1837	head	531	2531	776	2612
hat	735	1469	816	1633	/æ/	1020	1918	1184	1959
thumb	612	1265	735	1265	gun	980	1714	939	1551
earth	531	1388	653	1510	/ɜ:/	735	1633	776	1592

表1. 男性・女性話者の前舌母音と中舌母音

まず /i:/ と /ɪ/ は Trim と Marks の男性話者では大きな差は見られなかった。Gimson (1962) による初版から Cruttenden (2008) による第 7 版でもその音質に記述変化がなかったことから /i:/ と /ɪ/ は比較的安定した音であることが分かる。/e/ に関しては第 5 版以降で C [ɛ] に近い音質になる傾向があるとされていたように、その傾向は Marks に現れており、Trim に比べて、F1 は 290 近い差をつけた広い音となっている。/æ/ については Trim と Marks の F1 での差はわずかで、Marks が約 80 上回っている程度であり、わずかに広い音となっている。

女性話者のフォルマントを比較すると、/i:/ と /ɪ/ に大差はなく、男性話者と同様、この 2 つの母音は比較的安定した音となっている。/e/ と /æ/ に関しては Marks でいずれも広い音になっている。/e/ の F1 は Trim と比べて約 200 以上の差があり、/æ/ も約 160 の差をつけている。しかし、/æ/ に関しては Trim も Marks も 1000 ヘルツを超える高い数値となっており、/æ/ が広い音となる傾向はすでに Trim の時点からあったと考えられる。

Cruttenden が第 5 版以降指摘している C [ɛ] に近い /e/ と C [a] に近い /æ/ は特に女性話者に見られる結果となった。また、/æ/ が C [a] へと向かっている要因に /ʌ/ の移動があるという Cruttenden (1994, 2001, 2008) の主張も女性話者の場合には説明がつく結果となり、女性話者の F2 はその数値が高く、前寄りの /ʌ/ となっている。それに対し、男性話者は F2 の数値が低く、後寄りの /ʌ/ となっており、その分、/æ/ も女性話者ほど広い /æ/ とはなっていないことが分かる。

男性の場合、Gimson (1962: 99) の主張する狭い /e/ であれば狭い /æ/、広い /e/ であれば広い /æ/ という流れになっていると考えられる。

### 3. 後舌母音 /ɑ:, ɒ, ɔ:, ʊ, u: /

#### 3.1. 安定した音 /ɑ:/ と /ɒ/

“The quality is somewhat nearer to C [ɑ] than to C [a].” (Gimson, 1962: 105)

/ɑ:/ の音質は初版から第 7 版まで C [ɑ] に近い音とされている。小規模な修正としては、第 6 版以降では上記の下線部がなくなり、母音配置図において第 5 版以降より簡素化された点である。



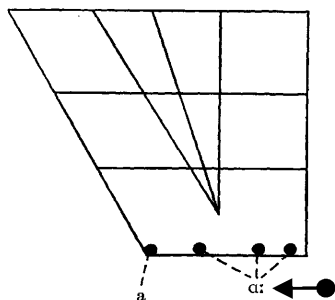
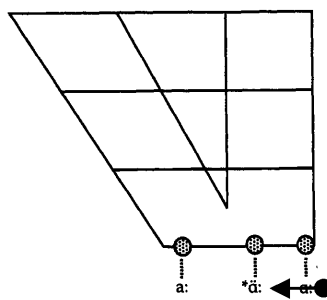


図10. ① /a:/ (Gimson, 1962: 105)



② /a:/ (Cruttenden, 1994: 107)

/ɒ/ も /ɑ:/ と同様に初版から第7版まで変化はなく、その音質も “The quality is that of an open lip rounded C [ɑ], i.e. secondary C [ɑ].” (Gimson, 1962: 107) と説明されている<sup>16)</sup>。母音図においても第5版以降ではより簡単になっている。

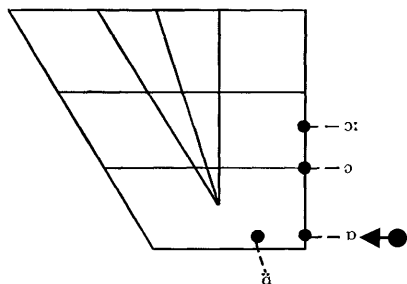
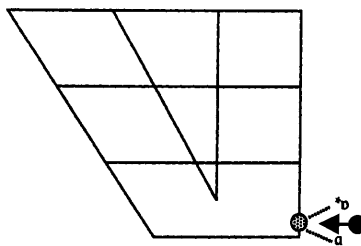


図11. ① /ɒ/ (Gimson, 1962: 107)



② /ɒ/ (Cruttenden, 1994: 108)

### 3.2. 移りゆく /ʊ/ と /u:/

/ʊ/ と /u:/ は第5版以降に大きな変化がみられる。まずは /ʊ/ での変化を見ていく。

- ① “The quality is that of a centralized C [o] = [ö].” (Gimson, 1962: 112)
- ② “The quality is that of a centralized C [ʏ] or [o] = [ö] or [ʏ].” (Cruttenden, 2001: 121)
- ③ “The quality is that of a centralized C. [o] = [ö] or [ʏ] or (with unrounding) centralized C. [ʏ] = [ʏ] or [ɨ].” (Cruttenden, 2008: 125)

/ʊ/ の説明は上記の①から③にかけてより詳細になっている。特に③では /ʊ/ が本来もつ唇の丸みがなくなり、舌の位置も中舌へと移っていることを示す記号が付け加えられている。これらの点は図12の③でも示されており、従来の後舌母音の領域から中舌母音の領域にまで移って

いる異音にも星印が付けられている。

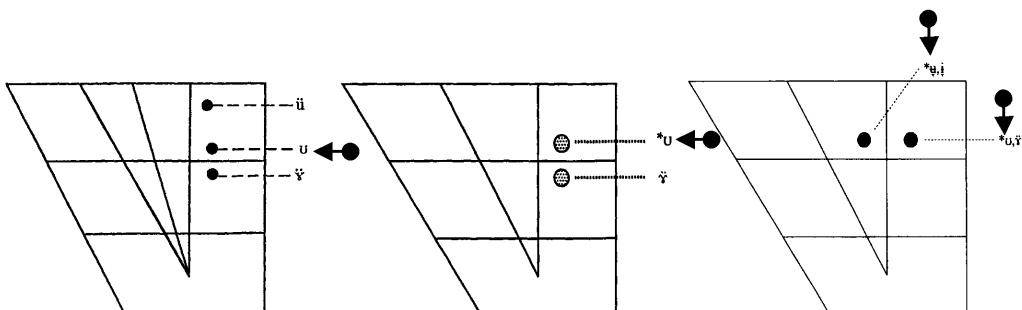


図12. ① /u/ (Gimson, 1962: 112) ② /u/ (Cruttenden, 2001: 121) ③ /u/ (Cruttenden, 2008: 125)

/u/ と同様に、/u:/ の舌の位置も中舌母音の領域に移る前舌化が見られる。初版での /u:/ の音質は次のように説明されている。

“The quality is that of a relaxed, slightly lowered and centralized C [u].”

(Gimson, 1962: 114)

図13では矢印が3つ付いている<sup>17)</sup>。矢印 A は上記の引用にある /u:/ の音質を指し、矢印 B は初版から第4版で説明されている特にロンドン周辺で使われる RP の /u:/ と、/j/ の後にくる /u:/ のかなり前寄りとなった [ü] を示している。しかし、第6版以降での /u:/ の前舌化はこれらの条件に限らず、前舌化がさらに進んでいることを示す記述内容になっており、母音図においても特に第7版では /u:/ の実現される領域が前方へと進んでいることがわかる<sup>18)</sup>。

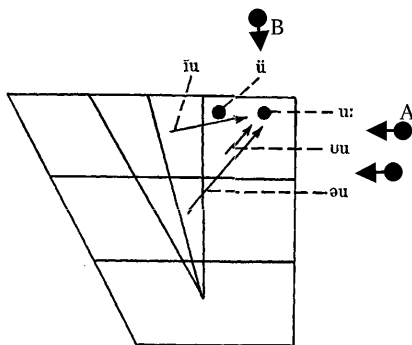


図13. /u:/ (Gimson, 1962: 114)

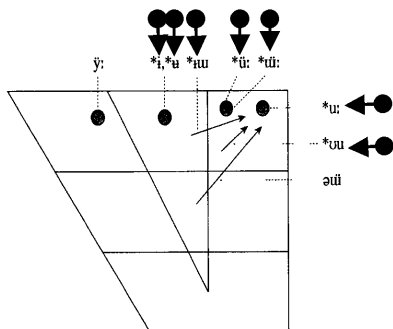


図14. /u:/ (Cruttenden, 2008: 127)

“Two types occur within General RP are (i) a more centralized monophthongal vowel [ü:] or [u:] or, with unrounding, [ü:] or [i:], and (ii) a

short diphthong [ou] or [i+w] (this being particularly common in final position (*do, shoe, who*).”  
(Cruttenden, 2008: 127)

Cruttenden (1994, 2001, 2008) は前舌母音の /æ/ が C [a] へと向かうその要因に /ʌ/ の前方移動があるとしていたが、/ʊ/ と /u:/ に関してはその要因について特に何も述べていない。そのため、単に /ʊ/ と /u:/ が前方へと移動しただけなのかもしれない。もしそうであれば、現代 RP の単母音は以下のような配置図になるであろう。

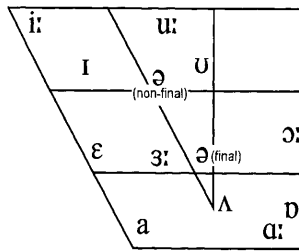


図15. RPにおける単母音の配置 (Hughes et al., 2005: 49)

図15を見る限り、/ʊ/ と /u:/ のみが移動している。しかし、音韻体系としては従来あった /ʊ/ と /u:/ の空欄を埋めるべく他の音、つまり、隣接する /ɔ:/ も移動する可能性がある。Wells (1982: 99) もこの点に触れているが、/ɔ:/ が一段高い位置へと移動したことにより /u:/ が前方へと押しやられたのか、それとも /u:/ が先に移動し、/ɔ:/ が引っ張られた流れなのかを決めるのは困難であるとしている。

第4節ではまず、/ɔ:/ の動向に注目し、第5節では後舌母音のフォルマントを測り /ɔ:/ と /ʊ/ と /u:/ の関連性を調べる。

#### 4. 狭い音へと移動する /ɔ:/

“The quality lies between C [ɔ] and C [o], i.e. [ɔ] or [o].” (Gimson, 1962: 109)

この記述内容は第7版まで変わっていないため、一見、何の変化も遂げていないように思えるが、初版から /ɔ:/ にはある動きが見受けられる。

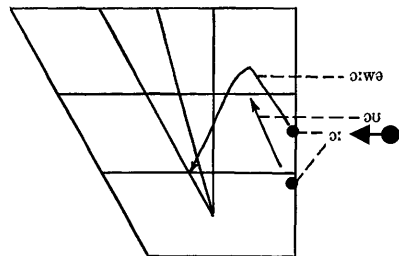


図16. /ɔ:/ (Gimson, 1962: 110)

“The quality of /ɔ:/ is now closer, so that, in advanced RP, it often approaches C [o].”

(Gimson, 1962: 109)

特に若年層の RP 話者が C [o] に近い狭い /ɔ:/ を使うとしており、Gimson (1962) は /ɔ:/ が狭い音へ移動する可能性を示唆していた<sup>19)</sup>。実際、Peter Roach の *English Phonetics and Phonology* 第3版 (2000) では /ɔ:/ が C [o] に近い位置となっている。初版 (1983) と比較すると、/ɔ:/ が大きく移動していることがわかる。

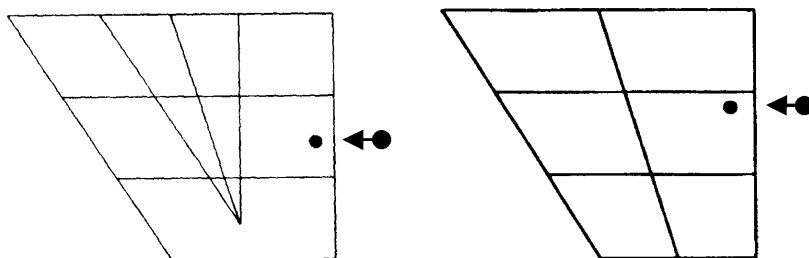


図17. ① /ɔ:/ (Roach, 1983: 18)

② /ɔ:/ (Roach, 2000: 20)

/ɔ:/ の動きについては発音辞典、*English Pronouncing Dictionary* (以下、EPD) を見るとより明確に現れてくる。以下の母音図では①は Daniel Jones による初版 (1917)、②は Jones の後を引き継いだ Gimson による第13版 (1967)、③は Peter Roach と James Hartman による改訂第15版 (1997) である。

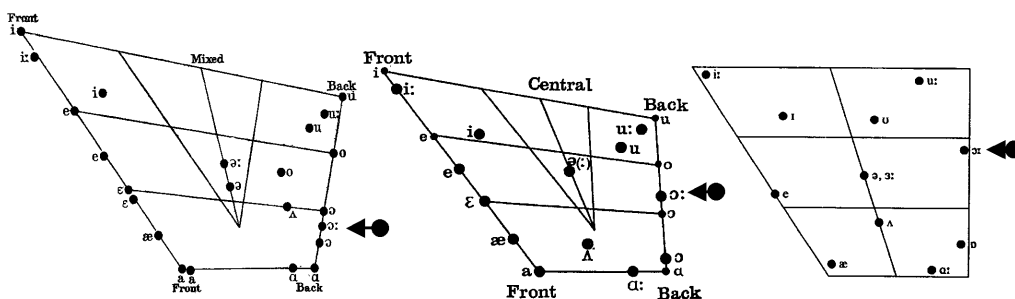


図18. ① /ɔ:/ (Jones 1917)

② /ɔ:/ (Gimson 1967)

③ /ɔ:/ (Roach and Hartman 1997)

まず、Jones と Gimson による母音図を比較すると、Jones (1917) は /ɔ:/ を half-open より少し下に置いているのに対し、Gimson (1967) は mid-close と mid-open の中間にまで上げている。Roach and Hartman による改訂第15版になると /ɔ:/ は C [o] に近い位置まで移されている。図

18の①から③を見ても分かるように、徐々に /ɔ:/ の位置が C [o] へと向かっていることが分かる。特に③では /ɔ:/ の移動だけにとどまらず<sup>20)</sup>、/ʊ/ は中舌母音の領域にまで移されており、/u:/ に関しても①と②に比べてやや前寄りとなっており、/ɔ:/ に押し出される形で /ʊ/ と /u:/ が前方へと移動したような配置となっている。次節では今まで扱ってきた後舌母音のフォルマントを測るとともに、この /ɔ:/ が /ʊ/ と /u:/ の前舌化に関係しているのかも調べていく。

## 5. 後舌母音のフォルマントと分析

第2節で行った要領で後舌母音のフォルマント数を調べ、その結果を以下の表にまとめている。

	Male					Female			
	Trim (1975)		Marks (2007)			Trim (1975)		Marks (2007)	
	F1	F2	F1	F2		F1	F2	F1	F2
glass	694	1184	853	1224	heart	692	1143	1061	1429
lock	531	1102	653	1061	/ʊ/	612	1020	857	1184
call	408	816	408	851	sport	531	857	571	939
good	408	1061	367	1388	bull <sup>21)</sup>	490	981	327	980
do	327	1224	286	1837	Sue	367	1265	286	1878

表2. 後舌母音のフォルマント

Ladefoged (2006: 190) は F1 と F2 の周波数が近ければ近いほど、その母音は後舌母音であるとしている。前舌化が進んでいるといわれている /ʊ/ と /u:/ をみると、男性話者での /ʊ/ では Trim で約650、Marks で約1000もの差があり、/u:/ においても Trim で約900、Marks で約1500もの差がある。/ɑ:/, /ɒ/, /ɔ:/ では /ʊ/ と /u:/ ほど差が見られないことから /ʊ/ と /u:/ は Cruttenden (2001, 2008) が指摘しているように、後舌母音の領域からかなり前方へと移動していると言える。また、Trim と Marks の F2 における /ʊ/ と /u:/ を見ると、Trim より /ʊ/ で約300、/u:/ で約600もの差をつけていることから Trim の教材が出版された後も /ʊ/ と /u:/ の前舌化は進行中であることがわかる。

女性話者でも F1 と F2 の差は /ɑ:/, /ɒ/, /ɔ:/ より /ʊ/ と /u:/ で大きく、Trim の /ʊ/ で約490、/u:/ で約900の差があり、Marks での /ʊ/ は約650、/u:/ で約1600もの差がある。男性話者と同様に、Trim と Marks でも /ʊ/ と /u:/ での前舌化が起こっている。

/ɔ:/ に関しては、Trim と Marks の男性話者では F1 と F2 において大差はなく、女性におい

でも Marks での F2 がやや高い数値である点を除けば、F1 での周波数に大差はない。ここで注目したい点は、/ɔ:/ と /ʊ/ の男女の F1 である。男性話者での /ɔ:/ と /ʊ/ の F1 には大差はなく、女性話者では Trim において大差はない。そのため /ɔ:/ は Roach and Hartman (1997) が示すような狭い /ɔ:/ の位置にあると言えよう。ここで問題となるのは前節で述べた /ɔ:/ と /ʊ/, /u:/ の関係であるが、本稿の末尾で示した表にあるように、/ɔ:/ が狭い音となっているために、/ʊ/ と /u:/ が前方に押し出された配置となっている。しかし、Marks の女性の場合は他の話者と異なり、/u:/ の前舌化が今回取り上げた話者の中で最も顕著であることからこの /u:/ が /ʊ/ と /ɔ:/ を引っ張っていると考えられる。

今回の結果では、Wells (1982: 99) が述べているように /ɔ:/ の移動が先か、/u:/ の移動が先かは判断できなかったが、/ʊ/ と /u:/ の前舌化だけでなく、/ɔ:/ の移動も関係していると言えよう。

## おわりに

広い /e/ と /æ/, 前舌化された /ʊ/ と /u:/ はイングランド北部の特徴でもある。イングランド北部の影響が何らかの形で影響しているのかもしれないが、むしろ音韻体系的に考える必要があるであろう。なぜなら、現代の発音に至るまでには、中英語の頃に起こった大母音推移 (the Great Vowel Shift) があるからである。Wells (1982: 184) によると、前舌母音では /i:/ → /ei/, /e:/ → /i:/, /ɛ:/ → /e:/, /a:/ → /ɛ:/ と変化し、後舌母音では /u:/ → /ou/, /o:/ → /u:/, /ɔ:/ → /o:/ へと近代英語にかけて変化している。この母音推移では前舌母音が時計回りに一段ずつ高い位置へと持ち上げられ、後舌母音は反時計回りに移っている。今回取り上げた現代 RP の単母音の中で後舌母音は従来の流れに沿った動きが見られるが、前舌母音の /e/ と /æ/ はその従来の流れに逆らった反時計回りになる傾向がみられた<sup>2)</sup>。今後、この前舌母音での反時計回りの傾向が続くかどうかさらに時間をかけて考察する必要があるであろう。

## 註

- 1) /i:/ は特に語末において二重母音化し、[i:] となることが多い。この特徴は初版からすでに指摘されており、Jones (1956: 31), O'Connor (1973: 154), Wells (1982: 140) でも指摘されている。
- 2) Wells (1982: 291) と Hughes et al. (2005: 48) も年配層が狭い /i/ を使い、若年層が広い /i/ を使うとしている。近年出版された発音辞典、*Longman Pronunciation Dictionary* (以下、LPD)、*English Pronouncing Dictionary* (以下、EPD)、*Oxford Dictionary of Pronunciation* (以下、ODP) では図3の②の位置に /i/ が置かれている。
- 3) 第4版では /i/ にのみ †† が付けられている。

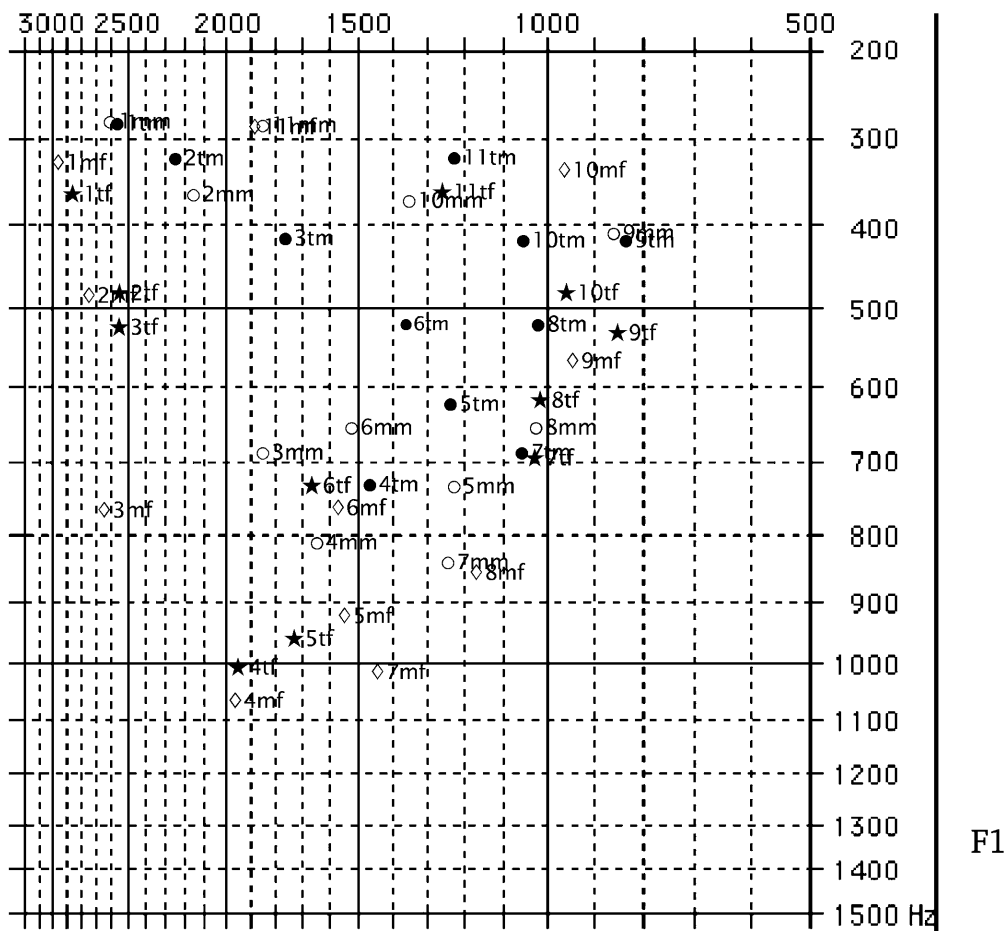
- 4) 第7版では“standard in RP” (Cruttenden, 2008: xviii) となっている。
- 5) Gimson (1980: 104–105) にその例が挙げられている。本文中で挙げた“problem”, “possible”, “interesting”はLPDでは初版(1990)から /ə/ を第1チョイスとしている。EPDでは第14版(1977)で“interesting”を除き、/ə/ を第1チョイスとしている。
- 6) Jones (1956: 32) は /ɪ/ を close と half-close の中間で、やや後寄りとしているが、語末の /ɪ/ は“an opener variety”、つまり C [e] に近い音としている。しかし、Wells (1982: 294) はこのような /ɪ/ を使うのは、例えば、陸軍将校が使うような RP であり、最近では /i:/ に近い音が好まれるとしている。
- 7) EPD, LPD, ODP や代表的な英英辞典、*Longman Dictionary of Contemporary English* (2003)、*Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2005)、*Cambridge Advanced Learner's Dictionary* (2008) においても /i/ という表記が使われている。
- 8) Wells (1982: 291) は狭い /e/ を絶対とは言い切れないものの、“old-fashioned RP” とし、広い /e/ は若年層が使うとしている。
- 9) 第4版でも広い /e/ を示す [ɛ] にマークがついているが本文ではその理由について特に言及していない。
- 10) Wells (1982: 97–98) も同様の見解を示している。
- 11) /ɜ:/ は初版から第7版までその音質について変化がない。
- 12) Jones (1956: 23, 45) は C [ɔ] 寄りの /ʌ/、[ɚ] としており、O'Connor (1973: 157) も後寄りの /ʌ/ を年配層の RP 話者、前寄りの /ʌ/ を若年層の RP 話者としている。Roach and Hartman (1997: ix) は /ʌ/ がもはや後寄りではなく、中舌母音の位置にあるとしている。
- 13) Wells (1982: 292) は /æ/ が広い音へと向かうその背景に /ɪ/ と /e/ の広い音への移動があるとしている。
- 14) スウェーデンの KTH が開発した音声分析ソフトで、<http://www.speech.kth.se/wavesurfer/> よりダウンロード可能である。
- 15) Ladefoged (2006) に付属されている CD-Rom からフォルマント図を採用した。
- 16) かつてこの /ɒ/ は、/b/ + /f, θ, s/ という組み合わせの語 (*off, cloth, cross*) において /ɔ:/ が使われていたが、今では /ɒ/ に取って代わっている。
- 17) /i:/ と同様に、/u:/ も二重母音化を起こすことがよくある。
- 18) Roach and Hartman (1997: ix), Ashby (2005: 28), Collins and Mees (2003: 98; 2008: 102), Kerswill (2007: 48–49), Wells (1997) でも指摘されている。
- 19) Gimson (1964: 135) も C [ɔ] に近い音質になりつつあることを指摘し、ロンドンの影響があるとしている。Wells (1982: 145) は /ɔ:/ の“an opener quality”を“old-fashioned RP”としている。
- 20) EPD 第15版では、/ɔ:/ の移動以外にも多くの点で相違点が見られる。本稿でも前半で取り扱った前舌母音の /e/ と /æ/ は Jones や Gimson と比べてかなり広い音を示す配置となっている。/ʌ/ に関しても、ほぼ中央位置にまで移動している。
- 21) Marks では女性話者に“bull”がなかったため、代わりに“pull”を採用した。
- 22) 前舌母音の /ɪ/ は広い音質へと向かう反時計回りの傾向が見られる一方で、語末での /ɪ/ は狭い音へと向かう傾向にあり、音声環境による相違が見られる。

RP における単母音の変化

付表：RP 単母音のフォルマント

	i:	ɪ	e	æ	ʌ	ɜ:	ɑ:	ɒ	ɔ:	ʊ	u:
Trim: Male (●tm); Female (★tf)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
Marks: Male (○mm), Female (◇mf)	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11

F2



参考文献

Ashby, P. (2005). *Speech Sounds*. 2<sup>nd</sup> ed. Oxon: Routledge.  
 Cambridge Advanced Learner's Dictionary (2008). Cambridge: Cambridge University Press.  
 Collins, B. and Mees, I. M. (2003). *Practical Phonetics and Phonology*, 1<sup>st</sup> ed. (2<sup>nd</sup> ed. 2008) New York: Routledge.  
 Crystal, D. (1995). *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge University



- Press.
- Crystal, D. (2006). *The Fight for English*. Oxford: Oxford University Press.
- Gimson, A. C. (1962). *An Introduction to the Pronunciation of English*, 1<sup>st</sup> ed. (2<sup>nd</sup> ed. 1970, 3<sup>rd</sup> ed. 1980, 4<sup>th</sup> ed. (edited by S. Ramsaran) 1989, 5<sup>th</sup> ed. [*Gimson's Pronunciation of English*] (edited by A. Cruttenden) 1994, 6<sup>th</sup> ed. 2001, 7<sup>th</sup> ed. 2008) London: Edward Arnold.
- Gimson, A. C. (1964). "Phonetic Change and the RP vowel system." In D. Abercrombie. *et al. In Honour of Daniel Jones*. London: Longman, pp. 131-136.
- Gimson, A. C. (1984). "The RP accent." In P. Trudgill. *Language in the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 45-54.
- Hughes, A. and Trudgill, P. (2005). *English Accents and Dialects*, 4<sup>th</sup> ed. London: Hodder Arnold.
- Jones, D. (1917). *An English Pronouncing Dictionary*, 1<sup>st</sup> ed. (2<sup>nd</sup> ed. 1924, 4<sup>th</sup> ed. 1937, 10<sup>th</sup> ed. 1949) [*Everyman's English Pronouncing Dictionary*] 11<sup>th</sup> ed. 1956, 12<sup>th</sup> ed. 1963, 13<sup>th</sup> ed. (edited by A. C. Gimson) 1967, 14<sup>th</sup> ed. (with revisions and supplement by S. Ramsaran) 1977, 14<sup>th</sup> ed. (revised by A.C. Gimson and S. Ramsaran) 1988, [*English Pronouncing Dictionary*] 15<sup>th</sup> ed. (edited by P. Roach and J. Hartman) 1997, 16<sup>th</sup> ed. 2003, 17<sup>th</sup> ed. 2006) Cambridge: Cambridge University Press. [First published by J. M. Dent and Sons Ltd, London].
- Jones, D. (1956). *The Pronunciation of English*, 4<sup>th</sup> ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jones, D. (1960). *An Outline of English Phonetics*, 9<sup>th</sup> ed. Cambridge / Tokyo: Heffer / Maruzen.
- Kerswill, P. (2007). "Standard and non-Standard English" In D. Britain. *Language in the British Isles*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 34-51.
- Ladefoged, P. (2001). *Vowels and Consonants — An Introduction to the Sounds of English*. Oxford: Blackwell.
- Ladefoged, P. (2006). *A Course in Phonetics*. 5<sup>th</sup> ed. Boston: Thomson Higher Education.
- Longman Dictionary of Contemporary English* (2003). 4<sup>th</sup> ed. Harlow: Pearson Education Ltd.
- O'Connor, J.D. (1973). *Phonetics*. Harmondworth: Penguin Books Ltd.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2005). 7<sup>th</sup> ed. Oxford: Oxford University Press.
- Roach, P. (1983). *English Phonetics and Phonology*, 1<sup>st</sup> ed. (2<sup>nd</sup> ed. 1991, 3<sup>rd</sup> ed. 2000). Cambridge: Cambridge University Press.
- Upton, C. et al. (2001). *Oxford Dictionary of Pronunciation for Current English*. New York: Oxford University Press.
- Wells, J.C. (1982). *Accents of English. Volumes 1-2*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wells, J.C. (1990). *Longman Pronunciation Dictionary*, 1<sup>st</sup> ed. (2<sup>nd</sup> ed. 2000, 3<sup>rd</sup> ed. 2008). Harlow: Longman.
- Wells, J.C. (1997). "Whatever happened to Received Pronunciation?"  
<http://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells/rphappened.htm>

(やまもと・こうじ 外国語学部講師)